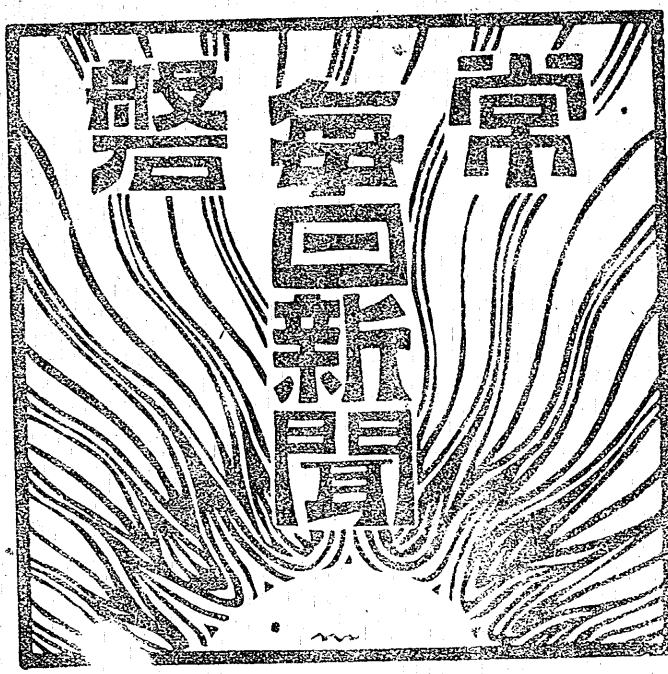


日刊 發行兼編輯人 中嶋文治 本社下町番地（電話六三〇番） 印刷所 常盤毎日印刷社



刊夕日二十月一

定額 一箇月 五圓 三箇月 十三圓 六箇月 二十五圓 一年 五十圓 郵費 別記 電話 六三〇番

常盤論壇
景氣の根柢 (43)
 經濟學博士太田正孝氏述
 モウ一つは金持でなければ
 贅澤をしない云ふ考に就
 ての誤であること之も河
 上博士の引いた例でありま
 すが、京都に曹源寺と云ふ
 寺があつて、其處に儀山と
 云ふ和尚があり、其の寺で
 滴水と云ふ水が修行をして
 居つた。恰度昨今のやうに
 暑い時で儀山和尚はお湯へ
 這入つた。さうすると其處
 へ滴水がやつて来て其處に
 あつた手桶に少し残つた水
 を捨てやうとすると、儀山
 和尚は「馬鹿ッお前は其の

一滴の水を何故に無難來に
 捨てるのだ。其の一滴の水
 でも使ひやうに依つては枯
 れんとする夏草も生さるで
 はないか」と言つて戒めら
 れたのでありますが、其の
 後此の曇水滴水も立派な和
 尚となりまじつたが、其の時
 の事の偶を作つてあの京都
 の曹源寺に於けるあの時の
 一滴の水は用ひように依つ
 ては一生用ひても盡さるこ
 とはないと云ふ意味であり
 ますが、此の水と云ふもの
 は經濟學に於て値がない、
 東京の水道の水は別であり
 ますが、値のない水を此の
 論に連絡させた所に於て非
 常な妙味があります。

日本の爲にモウ一つ私は
 申します。吾々は勤儉貯蓄
 を説き贅澤をしてはいけな
 いと云ふ時に方つて皆さん
 方に常に信じて戴きたいと
 云ふことは、今の世の中は
 最大多数の幸福と云ふこと
 ではありませぬ。昔はまア
 皆が宜ければと云ふことで
 ありますが、今は逆であり
 まして恰も或人が羊を百匹
 飼つてゐたが夕方になつて
 九十九匹しか歸つて來ない
 後に残つた一匹の爲に苦勞
 をしよう云ふ關係であり
 ますが、今の世の中の法律
 政治經濟に就て必要だとし
 て居ります。

三幸堂樂器店
 着ナフトール
 尺尺モスリン
 模様 銘仙
 平町 龜田屋
 電話五七七

優良樂器廉賣
 ギター、マンドリン、
 ハーモニカ、大正コト、
 尺八、明笛、軍用ラッパ
 其他琴三味線附屬品一式
 (カタログ進呈)
 平町二丁目

揃ひました
 いろいろな
新形洋服が
 値段は昨年より二割安
 立襟上下 拾圓ヨリ
 脊廣三組 十三圓五十
 銭ヨリ
 オーバー 六七圓位ヨ
 其他變つた新形洋服を澤山
 取揃ひてあります
十字屋洋服店
 平停車場前通り

今曉近火の際に早速御駈付御見舞を
 賜り難有御陰様にて類焼を免れ候間
 早速御禮に參上致す可きの所混雜中
 に付き乍略儀以紙上御厚禮申上度如
 斯に御座候
 一月十二日
 平町南町六九
齊藤寅吉
 電話七番

近火御見舞御禮
 今曉近火の際に早速御駈付御見舞を
 賜り難有御陰様にて類焼を免れ候間
 早速御禮に參上致す可きの所混雜中
 に付き乍略儀以紙上御厚禮申上度如
 斯に御座候
 一月十二日
 平町南町六九
齊藤寅吉
 電話七番

今曉舊郡衙前通り所有貸家より失火の際
 は早速御駈付消火に御盡力被下以御陰様
 烈風中にも不拘他への延焼を免れ鎮火致
 し候段御厚意の賜と深謝仕候實は一々拜
 趨御禮申上可の處甚だ乍勝手混雜中に付
 不取敢略儀紙上を以つて御禮申上候草々
 一月十二日
 織田齒科醫院
 院主 **織田豊太郎**
 電話四一六番

大和家
 平町南町
 電話十四番
 青木寫眞館
 平町南町
 電話四二二番
 日本基督平教會
 清風園保育部
 中村月城
 平町十五丁目
 羽石運送店
 平町南町

大和家
 平町南町
 電話十四番
 青木寫眞館
 平町南町
 電話四二二番
 日本基督平教會
 清風園保育部
 中村月城
 平町十五丁目
 羽石運送店
 平町南町

今曉近火の際に早速御駈付御見舞を
 賜り難有御陰様にて類焼を免れ候間
 早速御禮に參上致す可きの所混雜中
 に付き乍略儀以紙上御厚禮申上度如
 斯に御座候
 一月十二日
 平町南町六九
齊藤寅吉
 電話七番

謝近火御見舞
 元石城郡役所
 廳舎管理 **安島八郎**

謝近火御見舞
 元石城郡役所
 廳舎管理 **安島八郎**

謝近火御見舞
 元石城郡役所
 廳舎管理 **安島八郎**

近火御見舞深謝仕候
 株式會社 **磐越銀行**
 南町六九番地
 電話二〇五番

近火御見舞深謝仕候
 株式會社 **磐越銀行**
 南町六九番地
 電話二〇五番

近火御見舞深謝仕候
 株式會社 **磐越銀行**
 南町六九番地
 電話二〇五番

謝近火御見舞
 元石城郡役所
 廳舎管理 **安島八郎**

今曉烈風中を 元郡衙前の火事

八戸七棟鳥有に歸す

原因目下取調中

今曉午前一時十分平町十五丁目卅番地指物大工山崎喜一郎方から發火した、折柄物凄き烈風中の事とて紅連の炎は

附近に 燃れ擴がり棟續きなる久保田六五郎、小谷勇藏、大槻徳三、ブド一酒店佐藤丈夫、岩崎吾一、作山門の各家を焼き、泥亂名状し難くは盛んに燃ゆるを平消防組始の飯野、平窪、内郷、夏井、神谷、好間、湯本、草野、鹿島、高久、四倉等の各町村より應援消防組走せ付け

協力し て消火に盡力せる爲め午前二時四十分漸く鎮火するを得た、尙ほ附近には舊郡衙を始め元郡會議事堂、磐城共濟病院、日本基督教會堂、酒井醫院、磐越銀行の大建物林立せる事として其内の一棟に若し

飛火す する様な事があつたら折柄の烈風に煽られ火粉は八方に飛ぶ爲め平町の大半は鳥有に歸するに至つたであらうが幸ひ消防組必死の努力は遂に流石の猛火をも完全に屈服せしめ得る事が出来

感謝の 的となつて居る焼失戸数は住家八戸五棟、非住家二棟、損害約一萬五千圓と註せられ原因

石城郡の 人口と戸數

最近の調査

石城郡の現在戸數二萬五千六百六十六戸、人口二十萬一千七百四十五人、内最大村が内郷村の戸數四千八百九十戸、人口二萬八千七百四十二人で最少村が鹿島村の二百八十二戸、人口一千七百八十九人、尙人口一萬以上の町村は平町、湯本町、好間村の四ヶ町村で五千人以上の町村が植田、勿來、江名、小名濱、磐崎、赤井、四倉等である

寒行の金で 幼稚園設立

高久の目論見

石城郡高久村の中央寺院修行會では舊曆去六日の入寒當夜から寒行供養を行ふ筈で同寒によつて得たる喜捨を向後三ヶ年を積立て同村に衆園幼稚園を起し中堅思想を幼童から教導しようとする念願の下に此程村内各戸に其趣旨の宣傳ビラを配付した

四倉漁業 資金を借入

鈴木縣議に感謝

石城郡内各漁は一昨年の不

漁が極度に崇つて漁業家は非常に苦しい立場にあり各漁業組合ではこれが救済策として低利資金の借り入れに奔走してゐるが四倉町漁業組合では今回縣會議員鈴木長三郎氏の盡力によつて三萬六千圓の低利資金を借り入れる事ができたので非常に喜んでゐる

海軍志願検査 石城郡本年度海軍志願者検査は

郡本年度海軍志願者検査は

翁は骨と

皮になりけり

平町舊城跡居住元磐城中學校長植竹源太郎氏は舊臘中より胃痛を病み清水醫學士の手によつて治療中の所俄然一昨日頃から重態に陥

遂に昨日 午後五時

半頃寝むるが如く逝去した享年七十二歳、葬儀は十四日午後二時自宅出棺胡摩澤長源寺に於て佛式を以つて執行さるる筈、翁の家には嗣子がなく遺族は琴子夫人一人のみなる爲め多分夫人



家庭 夫人

妊婦の心得

妊婦は病氣では無いが不養生をするとお産が重くなり、自分自身にも又子供にも危険なことが起ります

或程度

ではない後日區域擴張に隣村地各部の併合策をも考へねばならぬが當事者の意向が果して何れに注がれるか頗る興味視されてゐる

兎の耳

知郡中富良野村後藤讓(三)は福井縣師範學校第二部を卒業した同縣坂井郡九岡町吾妻淺吉の名義を盗用し、履歷書を偽造して大正十三年四月空知管内の代用教員に採用されその後訓導に昇進し現在中富良野小學校長として教

來る二月九十の兩日元石城郡會議室に於て執行する事に決定同郡本年度定員は八十一名で平町では十日迄六名の志願者があつた

林部長の榮轉

警察廳長林正義氏は今回縣高等課勤務に榮轉する事となり十四日午前九時廿五分平驛發半郡線にて赴任の途に着く筈因に後任は三春署市毛徳三氏兼任する由

信用貸から

確實な登記貸へ平稅務署に於ては舊臘來昭和三年度の營業收益稅、資本利子稅、第三種所得稅の資料として管内各驛に於ける物貨の集散を調査する處あり舊臘中之れが調査を打ち切り目下貸家貸金の調査中にして十三日頃よりは愈々各當業者に對する基準調査を開始する筈である云ふか目下の調査資料に徴し前年に比して著しく異動を見たるものは各登記所に現れたる貸借事項の増加にして右は從來行はれたる信用取引が近來の不況から一般

募集

文藝其他投稿を募集します

皮になりけり」と興吟した程であるから思ひ残す所はなかつたであらう」

出來上り 翁は骨と

から充分に注意をせねばなりません。一、妊娠中慎しむことは(イ)運動を過ごさぬ事、(ロ)下腹に力を入れない事、(ハ)下腹、腰、脚を冷やさぬ事、(ニ)高い所へ手を伸ばさぬ事、(ヘ)飲食物、妊娠中は兎角胃腸の故障を起し易いから、消化の悪いものや

積極か消極か 平町の總豫算

近き將來の市制施行も考慮の内に加へて

平町の三年度豫算は目下各課の提示蒐集中で編成の完了は本月下旬乃至來月中旬頃になるであらう新豫算は同町の現状よりして消極的に出づれば多額を要するものは當分これを控へ經常費

昨年の 實行額約二

十萬圓前後を限度に止め臨時費の南裏新市街の土木繼續工事中材木町から南町を縦斷する小幹線延長六百間

小學校

の學級自然増加其他精々卅二三萬圓位のものであらうが小名濱商港の修築に續く平小鐵道の線上げ布設等町異數の膨脹から積極方針を以て臨まれば市應級の役場の移轉新築の急は勿論今俄に市制施行の表面的體裁を飾る爲

植竹源太郎儀

永々病氣の處藥石効なく一月十一日午後五時二十五分死去仕候間御通知に代へ此段謹告候也

追て送葬の儀は一月十四日午後一時自宅出棺平町長源寺に於て佛式を以て執行可仕候向故人の遺志により勝手ながら造花敬鳥香奠等一切御辭退仕候

昭和三年一月十一日 平町舊城跡

親戚總代 長野 幹
友人總代 桐谷 文平
青沼 鋒太郎

活動となり目下教育界の大問題になつてゐる